

[特集]

障害のある人の表現活動と発達

特集にあたって

白石 恵理子

アート・ブリュット、アウトサイダー・アート、エイブルアート等々、障害のある人の表現活動が耳目を集め、様々なメディアで取り上げられるようになって久しい。こうした用語も本来は別の意味をもっている、障害のある人のアートという文脈で使用されることが多くなっている。こうした背景には何があるのだろうか。

障害のある人のアートに触れるとき、これまでの価値観を覆されるような感動や、自分の奥深いところにあった人間性を呼び覚ましてくれるような心地よさを感じることも少なくない。それは、社会にとって障害のある人の新たな発見でもあり、可能性の気づきにもつながっている。しかし、表現者本人にとっての意味や、表現に至る生活や過程が置き去りにされてはいないだろうか。本特集は、こうした懸念に対し、障害のある人の表現活動を発達保障という観点からとらえることで、表現者本人にとっての主体的な意味を問うていこうとしたものである。その際、あえて多様なジャンルの表現活動を取り上げることで、このテーマに迫りたいと企画した。

川地論文は、戦前の作文教育の論究から、本人にとっての書くことの意味を徹底して重視することの重要性を述べる。昨今の資質・能力論とそれを重視する教育論への批判としても興味深い。山田論文は、教育を個人の成長・発達と社会の持続・更新をつなぐ営みととらえ、その結節点となる文化的主体性の形成について論じる。人間としての自然性を保存しながら文化を獲得し歴史をつないでいくために必要な表現活動のありようを、

障害のある人たちは教えてくれるという。岡論文では、自分で選んだ音を自由に組み合わせる音楽表現活動である音楽づくりをとりあげている。重度の障害のある児童生徒に対する音楽教育を創造する手がかりを与えてくれよう。

また、本特集では、テーマの特色上、実践報告を重視し、通常よりも多くの頁をさいた。

佐藤報告からは、障害のある生徒の音楽の授業づくりをどのように模索してきたか、なぜ歌曲に行き着いたかが述べられる。歌曲への出会いを通して、ありのままの自分を受け止めていこうとする思春期の生徒たちの葛藤が伝わってくる。西里報告では、書を通して心を表し、それが地域とつながり、地域に根ざして発展していった19年の取り組みが紹介されている。宮本報告では、一人ひとりにあった労働を模索してきた成人期の実践において、表現活動を誇りある仕事にし、さらには工房に結実していった経過が綴られている。さらに、石原・張報告では、織物や劇に長年取り組んできた入所施設での実践から、なかまと一緒に自分らしく暮らすことの値打ち、表現とは生活そのものの、人生そのものであることが語られる。

音楽、絵画、書、演劇などの魅力、表現者の躍動感やこまやかさを文字で伝えることには限界もあるが、行間を読者の想像力で補いながらお読みいただければ幸いである。

障害のある人にとっての、いや、人間にとっての表現活動の意味をゆっくり考えてみたいものである。

(滋賀大学 しらいし えりこ)